
MOON-2 『BOY MEET VAMPIRE』

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 2 『BOY MEET VAMPIRE』

【Nコード】

N9576L

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

世界にマーケットの拠点を持つ篠原財閥の御曹司 篠原裕希はいつしか『守られた世界』から抜け出したいと思い、『光』と『闇』が交錯する新宿へと足を踏み入れた――

『もう一つのおとぎ話』に続く現代版ヴァンパイアファンタジーの続編です。今回は和人・秀・朝子と裕希の出会いを書いています。

BOY MEET VAMPIRE（前書き）

（そうだ！不良になろう！）

彼はポケットの小銭を握りしめながら、青に変わった横断歩道を人込みをかき分けて走った。

ALTA横の歌舞伎町へと続く、道路のすぐ横に備え付けられたタバコの自動販売機へ行くと、小銭を入れ、友人の兄から借りたカードを、

『商品をお選び下さい。』

と告げる、スピーカーの下の青いランプにかざした。

ふと、そこで手が止まる。

「どれを買ったら『体にいいんだろう？』」

ちぐはぐな思考の果て、とりあえず、「『ONE』とか『ライト』ならまだ体にいいかな？」

そして、一番下の段から選んだそれを、押そうと右手を伸ばすと、

ガシャン

指先さえ届く前に商品は落ちて来た。

BOY MEET VAMPIRE

『BOY MEET VAMPIRE』

< 1 >

不夜城、新宿。

人々はネオン・ライトの人工灯の下、週末のこの街を支配したかのように、様々な方向へ行き交っていた。

デフレで景気が加速を続ける中、それでもここだけはそれを忘れて、深夜独特の賑わいを見せていた。

サラリーマン、女子大生、歌舞伎町に居を持つもの、ニート。

一見、華やかに見える新宿――でも、何処か孤独を背負っている。

少年がこの深夜の街を訪れてから、もう4時間も時間は過ぎていた。

左手首の羅針盤に目をやる。

深夜2:00.

そう告げていた。

少年――篠原祐希は初夏の風が彷徨う中、Gパンに黒のシャツ姿で東口ALTA

を望む駅の外壁に背を付き、じっとそのスクリーンを眺めていた。

短いCMの後、ファッション関係のCMだろうか、テロップが大きく横に流れた。

その直後、青いスーツとコートを見事に着こなした長身の男性の姿がフェード・インした。

碧がかった黒髪と不思議な光を放つ翡翠色の瞳。

このプロモート・ビデオももう何回見ただろうか。

少年は俯いた。

また、何人かの人が彼の前を通り過ぎる。

ふと、祐希は顔をあげた。

そして、心の中で呟く。

（そうだ！不良になろう！）

彼はポケットの小銭を握りしめながら、青に変わった横断歩道を人込みをかき分けて走った。

ALTA横の歌舞伎町へと続く、道路のすぐ横に備え付けられたタバコの自動販売機へ行くと、小銭を入れ、友人の兄から借りたカードを、

『商品をお選び下さい。』

と告げる、スピーカーの下の青いランプにかざした。

ふと、そこで手が止まる。

「どれを買ったら『体にいいんだろう？』」

ちぐはぐな思考の果て、とりあえず、「『ONE』とか『ライト』ならまだ体にいいかな？」

そして、一番下の段から選んだそれを、押そうと右手を伸ばすと、

ガシャン

指先さえ届く前に商品は落ちて来た。

振り返る。

何処かで見たことのある緑がかった黒髪を持つ長身の青年がサングラスをかけたまま、タバコの取り出し口に手を伸ばした。

「ちょうど買おうとしたトコロ。」

青年はよく通る甘い声で、タバコを取ると、ポケットから一万円札を取り出すと祐希の胸ポケットにすっ……と入れた。

「子供の夜遊びは、いけないな。」

一本取り出し、自分の胸ポケットから取り出したZIPのライター
の火を点ける。「それだけあれば、いくらか帰れるだろう、着払

いでもいいし。」

タバコを軽く吸い、青年は驚いたままの祐希に向かって言った。

「『この街』から、早く出たほうがいいよ、BOY。」

「あの……」

「和人！」

祐希が何か言おうとした時、青年の名を呼ぶ、もう一人の青年の
声が聞こえてきた。

「何やってんだ、和人。」

もう一人の青年……秀は、歌舞伎町の方から小走りに彼らの元
へ来ると、

「何？ナンパ？」

「お前じゃない。」

和人と呼ばれた青年は、強く首を振り長めの前髪を左手でかき上
げ、

「タバコがきれただけ。」

「あんま遅くなると、また朝子に怒られるぞ。」

「そうだな。」

和人は再び祐希に振り返り、「そういうこと。BYE。」

そっくり残すと秀と共に歌舞伎町の方へ歩き始めた。

「あ、あの……待って!!」

祐希の声に振り返る二人。

彼は和人のコートの袖を掴み、黒のサングラスをじっと見つめて
言った。

「俺を拾って下さい！不良になりたいんです。」

「不良？」

同じくサングラスをかけた秀が、驚いた風に復唱した。

一陣の風が彼らの間を駆け抜けていった。

新宿 大京町のマンションの一室。

時刻は深夜をとくに越え、早朝を迎えようとしていた。

「それで、ここに連れて来ちゃったってわけ？和人。」

朝子はカウンターキッチンの向こう側で言った。

「ここに来れば不良になれるって？」

「違う違う。」

和人は否定し、「まさかこのまま、あそこに置いとくわけにはいかないだろ？」

「何か事情があるらしいぜ、あのお坊ちゃん。」

部屋の南側に位置する和人の部屋で深い眠りにについている祐希を思いおこしながら、「それにもうすぐ満月だ。『あちらさん』の動きも活発になるだろうし。」

秀が答えた。

「確かに一人で放っておけないわね。」

朝子は呟いた。「この街は普通の人にとっては危険だわ。和人がかけた『結界』も弱くなってる。それだけに九桜くさくらの側の生命の糧が次々と『この街』へ集まって来る。」

「九桜の『復活』が近いのか？和人。」

秀の問いかけに和人は、

「いや、まだだろう。」

キリマンを一口含み、「九桜の側の近親者たちが九桜の復活のために動き出してる事は確かだけど。」

「九桜が眠りから覚めたら、また唯一無二の帝王の座をめぐって闘いが始まるだろう、闇の混乱だ。」

秀がそう言うのと二人は頷き、「早く『この街』からあの子を帰した方がいいんじゃないか？」

「そうだな。」

和人は軽い溜息をついた。「篠原祐希……か。素直に帰るか、自分で選択して今までの生活を変えようとしているのか……。そ

れによつてだな。」

「本当、和ちゃんは甘いね。」

秀は見えない尻尾をぱたぱたと振り、「俺と出会った時もそうだったな。」

彼は朝子に、「腹減った。ピザ3枚頼んでくれる？」

「秀ったら！」

朝子は呆れた。「この家のエンゲル係数高いのは、あなたのせだよ。」

初夏の夜明けまであと1時間はあった。

< 3 >

試合は36 vs 48で祐希の学校が、だんぜん有利だった。

その試合もあと15分をきった。

バスケ姿の祐希が、

「智弘、こつちこつち！」

ギャラリーの歓声に消されそうになりながら叫んだ。

額に汗がにじむ。

「オーライ、祐希！」

智弘が投げたボールに祐希は手を伸ばしながら、ドリブルの体制に入った。

しかし……ボールは彼の両手をすり抜けていった。

「え……」

彼は目を見開いた。

確かにボールは祐希の手の中に納まっているはずだった。

「ナイス！智弘。」

何処かで聞いたことのある声が背後でした。

そこには智弘から受け取った『もう一人の自分』が同じようにドリブルをはじめ、相手ゴールに向かっていった。

ロング・シュート。

ボールはゴールに見事にはまった。

「……………」

その光景を祐希は茫然と見つめていた。

ピーッ

試合終了を告げるホイッスルが鳴る。

「やったな、祐希！」

別のメンバーが『もう一人の自分』を取り囲む。

「違うよ、俺はここだよ！」

祐希は彼らに向かって叫んだ。

それでも、その祐希に気づく者はいない。

「どうして……………」

駆け寄って智弘の肩に手をかけようとする。

が、しかし…………祐希の手は空を切っていた。

「……………」

ジブン ヒトリ

祐希の心に、小さな穴が空いた。

（キライじゃないんだ、今の生活。ただ、このままみんなという事に疑問を感じたんだ。）

右手を握り締める。

今なお続く、ギャラリーの声援。

それはやがて、車の音に変わっていった。

ナニヲ ドウシタイ？

ダレ ニ ッタエラレル？

”イマ” ノ ジブン

そこで陽光下、祐希は目が覚めた。

< 4 >

新宿、大京町のマンションの一室で。

コン コン

額に汗をにじませた裕希は、ノックの音にドアに視線を移した。

「入るわよ、裕希くん。」

彼の答えも待たずに、トレイへコーヒーとトーストを乗せた女性が入って来た。

朝子だった。

「うなされてたようね、顔色が悪いわ。」

「はい・・・」

裕希は静かに答えた。

朝の光が白いカーテンをすり抜けて、室内を陽光で満たす。

「訊いてもいい？」

トレイをサイド・テーブルに置くと、朝子はベッドの片隅に腰かけた。

「八王子の学校の寮にいるはずの篠原裕希くんが、どうしてあんな時間にあの場所にいたのかな？」

「え、どうしてそんなこと・・・」

裕希は目を丸くした。

朝子は小首を傾げ長い髪を揺らして、

「生徒手帳見ちゃった。みんなびっくりよ。世界各地にマーケットの拠点を持つ篠原財閥の御曹司に出会っちゃうなんて。」

「そんな・・・」

裕希は軽く下を向き、唇を噛んだ。

「どうしたの？裕希くん。」

「みんなそうなんだ。」

裕希は静かに答えた。

「俺が篠原家の一員だというだけで皆身を引く。だから父さんは俺と同じ境遇を持つあの学校に入れたんだ。」

「その方があなたにとって『安全』だからよ。お父様はあなたの事を心配してるのよ。」

「後継者を失わないように？」

「裕希くん……」

「いつからか、そんな『守られた世界』から抜けだしたくなってたんだ。みんなが嫌いになったんじゃない。ただ、自分だけの『時間』が欲しかったんだ。」

「それで、この新宿^{まち}へ……」

裕希は小さく頷いた。

「そういう事。」

朝子は、軽く思案した後、につこりと笑った。

「和人がね」

「和人？」

「そう、タバコを買った男性の方よ。」

「うん。」

「二つの約束が守れるなら、好きなだけここにいていいって。」

「本当！？」

沈んでいた裕希の表情が明るくなる。

「一つは」

朝子は言った。「一人でこの新宿^{まち}を出歩かない事。もう一つはちゃんと学校に行く事。」

「うん！約束するよ。」

裕希は大きく頷いた。

「和人は秀の仕事で今日の午前中は出かけてるけど、午後は新宿

を案内してくれるって。」

「仕事？」

裕希は小首を傾げ、「プーターローじゃなかったんだ。」

「プーターロー？」

朝子は思わず噴き出して、「そう見られちゃったか、あの二人。」

「仕事って何の仕事？」

「そのうちわかるわよ。」

朝子はウィンクしてみせた。「さ、お腹空いたでしょ？朝子さん特製のモーニング・セットでも召し上がれ。」

「朝子さんっていうんだ。」

「ええ。この家の『主婦』してるわ、もちろん独身だけだね。」

彼女は右手を差し出し、

「よろしくね、篠原裕希くん。」

「よ、よろしく。」

裕希はそつと朝子の差し出された右手を握った。

< 5 >

新宿・東口ALTA前の広場の一角に立つ、緑豊かな樹の下で、裕希はサングラスをかけた和人の姿を見つけると、はしゃいで手を振った。

「和人！」

「裕希・サングラスしてるのに、よく俺がわかったな。」

和人は不思議そうに少年の前で首を傾げた。

確かに、週末のこの街は夜のそれとは比較にならない程、人で溢れ返っていた。

和人が疑問に思うのも当然である。

「だって・・・何か和人だってわかったんだもん。背高いし、それに・・・」

裕希は、少し口をつぐんだ。

「それに、つて？」

和人は優しく尋ねた。

「うん。」

少年は青年を、改めて見上げた。

180cmはあるだろう長身に、スレンダーな体。

そして、何より。

陽光があたると、不思議な碧色の光を反射させる少し長めの前髪。

（何処かで見たことあるんだよね・・・和人のこと。）

『あれ』が、出逢いの『初めて』じゃない気がする・・・。

裕希は、ALTAのスクリーンを何気なく見上げた。

そこには。

和人と同じように、黒いサングラスをかけた長身の男性モデルの姿。

初夏の訪れを思わせる、明るい色のロング・コートをふいに脱ぎ捨て、黒のスーツ姿で振り返る。

揺れる、碧がかった黒髪。

『VOI'S』と有名な外国ブランドのテロップが横に流れる。

そのまま、青年の姿は文字とオーバー・ラップして、画面はモノクロに変わり終わりを告げる。

ほんの30秒ほどのCM。

ALTA前の広場の人々は、そのCMを待っていたかのように小声でモデルの名を呼んでいた。

車道沿いのため、裕希の耳にはそのモデルの名前がよく聞き取れない。

「裕希。何、ボーツとしてるんだ？」

傍らで和人が尋ねた。

「ううん、何でもない。」

裕希は慌てて両手を振ると、「何かね、昨夜会っ前からずっと和人のこと、知っていたような気がしたただけなんだ。」

「そう・・・。」

「うん、ただそれだけ。気のせいだよね。」

裕希は笑って言った。

その表情を見て和人は、

「かもね。」

意味あり気にくすくすと笑い始める。

「何？和人。そんなに俺の言うことおかしい？」

「そうじゃないよ、デジャ・ヴだろ。」

それから青年は少年の背を押した。「行こう、篠原家の御曹司が
く着たきりスズメ>じゃ困るからな。」

「それは、言わない約束でしょ！！和人！！」

「はいはい。」

サングラス越しに、和人の微笑が見えた。

「・・・ってか。」

東口を抜け、高島屋に向かった裕希と和人。

そのこの8Fのカジュアル・ウェアのスペースに連れて来られた裕
希は閉口した。

そこには『MONA』『EXZL』『リターナ』etc.

「有名ブランドばかりじゃんっ！！！！」

「そうだけど。」

和人は気にした風もなく、手近な白いパーカーを手にとって裕希
の体に軽く当てた。

「合うじゃん。」

さらに、一言。

裕希は、ちらつと値札を見た。

「・・・和人。」

少年の予想どおり、「0」が一桁違う。

「あのね・・・」

裕希にとっては、確かにその金額は『普通』のもの。

だが、ここにもそれが『普通』と思う人がいるとは・・・。

空いた口がふさがらない。

「気に入らない？」

和人は尋ねた。

「違う、違うっ!!」

裕希は和人からそのパーカーを奪い取り、元に戻すと白いYシャツの袖を引っ掴みフロアの隅へと引きづり込んだ。

「あのね、和人。ここでは、俺は『篠原』じゃないの!」

小声で訴える。「ただの家出少年。和人の気持ち嬉しいけど・・・一緒に住ませてもらう以上、アルバイトもやるつもりなんだから、服だってこんなブランド品じゃなくいいの!」

ユニクロとかX&Iとかそういうのでも贅沢な身分なんだから。」

「だけど、裕希。この新宿^{まち}じゃ・・・」

「この新宿^{まち}とかどうかという問題じゃなくて!それに」

一番の『疑問』を問いかける。「普段着で和人も朝子さんも秀さんもブランド品、見事に着こなしちゃってるけど、一体どういう仕事してるの?」

「そのうちわかるよ。」

和人は前髪をかきあげ、そっけなく答えた。

「・・・もしかして。朝子さん、夜の仕事も和人と秀さん、あるって言ってたけど」

上目づかいに和人を見つめる。「まさか、ホス・・・」

「言うな!」

和人は初めて、声を荒げた。「朝子がなんて言っただかしらないけど、俺たちはマトーナ仕事して稼いでるわけ。だから変な想像しないでくれよ。」

ため息をついて、肩をすくめる。「・・・ったく。朝子は。」

「朝子さんのせいじゃない。和人や秀さんが隠すからいけないんだよ。」

「・・・隠してないよ。」

ふう・・・と軽く息を吐き、諦めたようにサングラスを外す和人。

「・・・。」

目に飛び込んだのは、翡翠色の瞳を持つ、一人の青年・・・。

あまりにも端正な顔立ち。

裕希は一瞬、言葉を失った。

出会ったのは、夜だったしさつき会った時からずっとサングラスもしたまま。

（綺麗な人・・・こんな人、本当にいるんだ・・・本当に日本人？）

少年の心の中に、いろんな思いが重なる。

「裕希。」

和人は優しく声をかけた・・・甘いハスキー・ヴォイス。

「・・・やっぱ、どこかで会ったことあるよ、和人。俺。」

「だろうね。」

和人はやつとくすり、と笑った。「さつきのALTAのスクリーンで、『俺』を見ただろう？」

「え？」

一瞬の間に、フェード・バック。

ALTAのスクリーンの中で、春色のコートを無造作に脱ぎ捨てた青年。

「え、え、え”!!」

「シーツ！」

和人は形の良い口元に、左手の人差し指を立てた。「これでわかったろ？俺が秀がつくったプロダクション『Office To One』の専属モデルだったこと。」

「和人と秀さんが・・・!?あの『Office To One』の・・・」

「そう。」

和人はため息をついた。「そういう事。」

「そういう事・・・」

裕希もため息をついた。「俺の学校、男子校だったけど噂は聞い

てたよ。イタリアのマドモアゼルのイメージを脱しきれなかった『MONA』ってブランドが、突然素人の

モデルを起用して大成功……それと同時に、そのモデルの事はトップ・シークレット。『Office To One』の尾崎秀久さんの名前もあつという間にトップ・クラス。

今じゃ、国内だけじゃなく、国外のブランドもその『謎のモデル和人』を起用して着々と世界進出してゐるって。」

「さすがお坊ちゃま学校だね。ブランド品の情報は早い。」

「かーずーとー。」

裕希の目が再び上目づかいになる。「今度、『お坊ちゃま』とかそんな感じの言葉使ったら、和人のことぜーんぶ、バラしちゃうから。」

「言わない、言わない。」

彼は、慌てて口をつぐんだ。

と、そこに。

「あ、あの人って……」

お嬢様風の若い女性二人が、エスカレーターの横でちらちら二人の姿を見ていた。

「やばっ！」

裕希は和人の左腕を両手で、引っ掴んだ。

慌ててるのは、何故か裕希の方。

「こっちこっち!!」

非常口に向かって彼の腕を引っ張る。「和人の事がバレたら、一緒にいた俺まで大変!!」

あんま良く分からない理由をひっさげ、裕希は非常口を開いた。

「早く逃げよう！」

「裕希。」

和人は彼の青いパーカーを着ている裕希の言葉に従いながら、

「俺たち、銀行強盗未遂でも万引き未遂でもないんだから。」

「そっちの方がまだマシ!!」

裕希は階段を降りながら、軽く振り返り、「事が事を呼んで『篠原家』に連れ戻されちゃ俺かなわないからね。あと」

と、ついでに、「今度からはユニクロとかXXIとか、ふつーイーイー、の服着ようよ。EDWINにTシャツがお気に入り
の秀さんみたいに。」

「はいはい。」

世界に名を知れる大財閥の御曹司は、意外に儉約家だった。

（こういう授業なんだろう。経済専門の学校かな、まるで朝子に弟がいたらこんな感じっていうような。。。）

和人は、珍しく朝子と秀以外の『人間』に興味を持った。

< 6 >

「すごいや、和人。」

裕希は感嘆のため息をつきながら、車道側を歩く長身の和人を見上げた。

「何が。」

和人は裕希に視線を落とした。

「だって、有名ブランド扱うお店には、必ず和人のポスターが貼ってあるんだもん。」

それでいて、『モデルとしての和人』はトップ・シークレット。」

「秀の『作戦』だよ。」

彼は肩をすくめた。「公表しちゃうと、神秘性が欠けるの話題性に欠けるのかさ。」

「秀さんもすごいよねー。そこまでマスコミから和人を守っちゃうなんて。」

「単に、俺を『ダシ』に稼いでるだけ。」

「そんな事ないよ、和人。きつと秀さんは、和人が持つ無限の可能性を試してるんだよ。」

新宿大通りを人ごみにまぎれて歩きながら、裕希は「どんなタイ

プのブランドも、和人なら着こなせるから。カメラ・アングルとかもいいし。」

「秀はもともとフリーのカメラマンだったからな。」

和人は答えた。「あいつから、カメラと被写体失くしたら何にもなくなってしまうよ。『昼の住人』として。」

「和人……。」

裕希は、少し翳を落とした彼の翡翠色の瞳を見逃さなかった。

「……秀さん、何かあったの、前に。」

「そのうちにね、裕希。」

和人は微笑して答えた。

「俺ね。」

新宿の〇Ｉ〇Ｉ近くにある、ショップで、「今までの自分を変えたい、守られる存在じゃなくて、何かを守る側に立ちたいなっと思っって学校の寮を飛び出したんだ。」

「らしいね。」

数点の服をレジで精算しながら、「朝子がどうしてもお前がそうしたいなら、そうすればいいって……それで、マンションに住まわせることにしたんだ。」

「うん。」

「いつか裕希にも、『守りたい』って想う人や出来事が見つかると思うよ。」

「和人は？」

レジの女性から、洋服の入った袋を受け取ると２人は出口へと向かった。

より明るい陽光が、二人の目を直撃する。

夏はもうすぐ。

今年は例年に比べて、G・W前半まで雨や涼しい日が続いたが、今はもう夏の陽気。

和人は白いシャツの袖をめくった。

裕希の先刻の問いかけ。

「和人にも守りたい人とか何かある？」

「さあね。」

和人は歩きながら、通りすがりの人々の軽い視線を気にした風もなく、「もしかしたら、俺もその『何か』を見つけてるのかもね。」

「もしかして……だから、秀さんのプロダクションに入ったの？」

「あれは」

裕希に向かって、「単なる気まぐれ。」

「和人……」

少年は肩を落とした。「一応、スカウトされたんだから、少しは喜んで……」

と、ふいに、裕希の視線が大通りの向こう側に向けられた。

先ほど寄った、高島屋と三越の間の、細い車道の角。

黒いドレスに身を包んだ彼女は、小さなテーブルの前に腰かけ『裕希』を見つめていた。

「……誰だろう、あの人。」

裕希は歩みを止めた。「何か、さっきからずっと見られてる気がする……。」

「……。」

和人も口元まで、レースで包んだ女性を見つめた。

微かに目を細める……

「ねえ、和人。どうしたの？」

裕希の台詞に、和人は、

「占い師だよ。ここには、あんなのゴロゴロしてるさ。」

視線は、向かいの女性に向けられたまま。

「占い師か。」

裕希は答えた。「やっぱり、こういう新宿と違って心に悩みを抱えた人が集まるのかな。」

「そうかもね。」

「そうだ!!」

ふいに、裕希は紙袋を和人の胸元へ押しやり、車道に向かって走り出した。

「俺、占ってもらってくる、和人!!」

「裕希っ!」

あつという間に、赤信号で止まっていた車の間をすり抜けていく裕希の後を和人は追った。

刹那。

信号が青に変わる。

和人は車道から、素早く身を引いた。

「ちっ!!」

舌打ちし、裕希の後姿を見守る。「九桜の『側』か・・・!」
和人の裕希の名を呼ぶ声も、微かな呟きさえも街の喧騒がかき消していった。

< 7 >

『彼女』は微笑した。

「何か悩んでいるのかえ?」

目の前に現れた少年・・・裕希に向かってそう問いかける。

「え・・・っと。」

勢いに任せて『占い師』の元に来てしまった裕希は、一生懸命言葉を探した。

そして、

「あなた、占い師なんでしょ? 悩みとか相談じゃなくて」

そこで少し戸惑ったように、「『運命』って変えられるものなの? それを知りたいんだ。」

「そう・・・」

口元を覆う黒いレースの向こう側で、女性の紅の口元が動いた。

「『運命』を変えたいと思うのかい? 『篠原財閥』の御曹司とも

あろう者が。」

微笑む女性。

「え、なんでそんなこと……」

「私は占い師。人の『運命』を見極める者……ごらん、この水晶を。」

彼女は視線を、手元の蒼い水晶に落とした。

陽光に反射し、一つの原石を思い起こさせる。

裕希は、そつとその水晶を覗き込んだ。

うつすらと映る自分の姿。

それ以外は、全て『蒼』。

「この新宿^{まち}に来る者は、皆、今までの自分を変えたがっている。」
「……」

少年は静かに、彼女の言葉に耳を傾けていた。

「何も話さなくても、この水晶と私はこの街の『全て』を知っているよ。」

顔を上げる裕希に、

「お前が和人と出会うという事も。」

「え、どうしてそんな事まで！」

和人から借りた蒼いパーカー姿の少年は、言葉を失った。

和人たちと出会ったのは、たった昨夜の話。

「私は占い師。人の運命を司る者。」

「……じゃ、俺の運命も変えられるの？俺は『守られた世界』から抜けだしたくてこの街に来たんだ。」

「誰もお前と同じだよ……『人』はいつでも何かを求める。今までと違う何かを。」

「……」

「篠原財閥の御曹司としての『運命』は嫌なのかえ？」

「いつかは俺も、父さんの跡を継ぐと思う……だけど」

裕希の声に思わず力が入る。「もっと別の世界を見てみたい。いろんなものを見て、感じて、自分が本当に父さんの跡を継ぐ運命な

のか、そうでないのか。」

「和人といたいのだろ？裕希、本当は。」

「！・・・」

裕希は少し沈黙して、「・・・でも、俺、和人たちのことあまり知らない。」

「それもそうだろう。」

女性は小声で笑った。「『光』と『闇』の境界線がある限り、お前は『全て』を知ることにはできない――否、和人はその『真』の姿をお前には見せないだろう。」

「どういうこと？『光』とか『闇』とか。」

「そのうちわかるさ・・・さあ、お前は自分の『運命』を変えたいのだろう？」

「・・・うん。」

「手をお出し。」

「手を？」

「そう。お前の『運命』を変えてあげよう、お前の望み通りに。」

「・・・・・・」

（手相占いかな・・・でも、なんで和人と俺のことそんなに知ってるんだろう・・・）

「さあ・・・」

裕希は、差し出す彼女の右手に、まるで暗示をかけられた風に自分の手を差し出した。

ザクッ！！

「痛っ！！」

裕希は慌てて、右手をひいた。

見つめると、手のひら一面に紅の血がにじみ出ている。それを見て、

「あなたは一体・・・！」

「裕希っ！」

一陣の風が、占い師と裕希の間を駆け抜けた。

素早く、かばうように少年を自分の背後へと押しやる、和人。

「和人!!」

裕希は思わず声をあげた。

「貴様、裕希に何をした！」

きつい眼差しを占い師へ向ける、和人。

「もう遅いよ、和人――否、『帝王』。」

女性はすつと席を立つと、右手をゆつくりと振り上げた。

「お前の『運命』も、篠原裕希がこの新宿へ足^{まち}を踏み入れた時に既に動き始めている――『闇』が動きだす序章に過ぎない。」

「九桜の側か！」

「どういう事？和人！」

青年の背後から、裕希は声をかけた。

女性は、ニヤリ・・・と笑った。

「！」

一瞬、裕希に気を取られたものの、和人も左手を振り上げた。

「遅いよ、『帝王』！」

彼女の右手が素早く振り下ろされる――と、同時に。

音を立ててビルの谷間から何かが押し寄せて来た。

「伏せろ、裕希！」

その頭上を突風が、通り過ぎて行った。

「キヤーっ!!」

あちこちで悲鳴が上がる。

路上に倒される、人々。

車道には、駐車中の車がその『突風』に煽られて次々と走行中の車に激突する。

穏やかな週末の新宿は、突如『惨劇』の場になんて変わっていった。

「こいつ・・・！」

和人は立ち上がると、両腕を組み目の前に突き出した。

翡翠色の瞳が光ると同時に、碧色の閃光が占い師の胸元を直撃した。

ほんの1秒ともしない刹那の間。

よけ損ねた女性は、口元に朱の色を一筋流しながら、

「我らは、貴様を『帝王』だとは認めぬぞ、和人！！」

再び振り下ろされる、右手――そこには蒼い水晶があつた。

中空で割れたそれは、彼女が放った突風と共に、和人の瞳を直撃した。

「つつ！・・・」

和人は、片膝を地面に付き両眼を左手で押さえた。

「和人っ！！」

裕希は慌てて、うずくまる和人に駆け寄った。「俺をかばって・・・！！」

「逃げろ、裕希、この新宿まちから。ここは、お前の思っている世界じゃない！」

「わけわかんないよ、和人！！」

「逃がさないよ、『帝王』！」

中空に浮かび、占い師の女性は再び手をあげた。「香木でなければ、お前は倒せぬ。だがここで篠原裕希を奪うことはできるさ！」

黒いレースをもぎとった彼女の口元には、白銀に輝く2本の牙。

「！！・・・」

裕希は『占い師』を見上げた。「どうなってるの？なんなの、これ・・・」

そこに。

もう一つの『風』が訪れた。

刹那。

女性は、振り返るのがやっとだった。

何故なら、彼女の胸元は、鋭くとがった爪が背後から突き刺さっていたのだから。

「いやだねえ、九桜の一族にしては」

ザクッ！

勢いよく、その手を引つ込める。

「昼間からかよいい人を『ナンパ』かよ。『夜』だけでも俺たちや手いっぱいなのに。」

「ちっ！！」

女性は紅の胸元を抑え、中空高く飛翔した。

辺りは『惨劇』。

誰もその『異変』には気づかない。

ただ3人を除いて。

「これで最期だと思ふなよ、『帝王』。夜が来るたびに我らとそなたたちとの闘いは続くのだからな、九桜様の『復活』まで。」

すっ・・・と、占い師は黒いドレスの裾を翻し、中空に消えた。

「大丈夫か、和人・・・！」

秀だった。「目か・・・！」

「大した事ない。寸前でかわした・・・。」

和人はため息をつき、身を起こした。「秀。裕希を・・・」

「ああ。」

茫然と立ち尽くす少年に、「大丈夫か、裕希。びつくりしただろう。」

やっと風は収まり、遠くからパトカーと救急車のサイレン音が聞こえて来た。

「・・・っていうか・・・」

ややあつて裕希は、「何が何だか全然わからない・・・。」

「そりゃ・・・ね。」

秀はEDWINの後ろポケットからハンカチを取り出すと、裕希の血を抑えた。

「そのうちわかると思うけど、俺と和人にはもう一つの『仕事』があるの。その延長上がこの出来事。」

辺りに散乱している、ビルのガラス窓の破片。

「裕希。」

和人は振り返り、「帰るなら今のうちだぞ。『今』ならこの街を抜け出せる。お前は『闇』に魅入られていない。」

「和人……」

裕希は暫く沈黙して、俯いた。

それから、

「あの占い師。俺がここに来た時点で、もう運命の歯車は廻り始めてるって言った。そしてそれは和人にも影響があるって。」

「……裕希。」

「俺が来たことで和人の『運命の歯車』が廻り始めたっていうのなら、俺、自分の運命も和人の運命も、正面から見ていたい……たとえば、和人がどんな人でも、

秀さんや朝子さんにも秘密があっても。それを見届けるのが、俺の『運命』だと思う。」

サイレン音が周囲に集まり、報道関係者も集まり始めていた。

「だって、和人は和人だし、秀さんは秀さん、朝子さんも朝子さん。」

彼らは少年をじつと見つめていた。「それだけで十分じゃん？それ以上、何が欲しいの？今の俺にとって。」

「裕希。」

和人はそつと裕希の柔らかい茶色の髪に手を置いた。「それで十分なのか、お前にとって。」

「うん！」

につこりと笑う少年。「だって、俺自身『家出少年』だもん。」

「お坊ちゃんにしては、意外とタフなんだな、裕希は。」

「ってか、話がややこしくて簡単に解釈しようと思って。」

秀の問いかけに、裕希は平然と答えた。

そして。

「とりあえず、ここから逃げない？篠原とトップ・シークレット

のモデル和人がいるから。」

「そうしよう。」

秀はニヤリと笑って答えた。「マンション（大京町）が見つかったらヤバイしな。」

一般市民がカメラに惨状を必死の面持ちで訴える合間を縫って、彼らは新宿御苑を望む大京町のマンションへと、裏道をたどって向かった。

< 8 >

夢を見た。

辺り一面、桜の花びら……その根元を覆い尽くす花弁の絨毯。幾重にも幾重にも。

薄紅色に染まった天空から、降り注ぐ。

（どこだろう、ここ。）

制服姿の裕希は、手のひらに落ちた花弁の一枚を見つめたまま、思った。

見たことのない場所。

遙か遠くには、灰色のビル群の姿。

わからなかった。

昼なのか夜なのか、自分はどこにしているのか……

「……。」

裕希は、桜の花弁の絨毯を数歩歩いた。

花びらの嵐で、なかなか見えなかった前がやっと微かに見えた。

「……。」

桜の樹木の下。

一人の青年が、片膝を着いてじつと足元を見つめていた。

裕希と同じく、もうどれくらい『彼』はここにいるのだろう……。

黒いコートの肩に、裾に、桜の花びらが降り積もっていた。
(誰だろう・・・。)

カサッ・・・

青年に向かって、一步、ゆっくりと踏み出す裕希。
と、同時に振り返る青年。

「あっ・・・！」

何処かで見覚えのある、翡翠色の瞳。
碧がかった黒髪。

(何処かで・・・！)

思い出せない。

思い出そうとすると、頭が激しく痛む。

(どうしたんだろう・・・俺・・・！)

微かな焦りが、裕希の心を捕えた。

「だから、来ちゃいけなかったんだよ・・・裕希。」

青年は、静かに立ち上がり目の前の少年にそう告げた。「ここは、
お前の来る『場所』じゃなかったんだ。」

青年のコートから、桜の花弁が舞い落ちる・・・

「誰、あなたは・・・！」

裕希は尋ねた。

そして、何気なく青年の足元・・・桜の太い樹木の下を見た。
「！・・・」

そこには。

桜の花びらに埋もれ、横たわるもう一人の青年の姿。

裕希の気配に気づいたのか・・・青年はゆっくりと瞼を開いた。
それは。

立ちあがった青年とは全く正反対の、闇色の瞳、ビリジアン・ブ
ルの光を放つ瞳を持つ青年。

青年の『目覚め』に気づいた、裕希は思わず、

「和人っ!!」
その名を呼んだ。

ガシャンッ!!

「裕希くんっ!!」

新宿 大京町のマンションの南側の一室で。

和人の部屋から、大きな物音が彼らのいるリビングに飛び込んで来た。

「裕希!!」

カウンター・テーブルの席から立ち上がると、和人は、自分の部屋で寝ているはずの裕希の元へ向かった。

バタンッ!!

勢いよくドアを開き、

「裕希っ!!」

眠っているはずの彼の名を呼んだ。

時刻は深夜2:00.

和人のパジャマを着た裕希は、朝子がサイド・ベッドに差し入れて置いたミルク入りのホット・キリマンとサンドイッチをテーブルごと床に落としたまま、茫然とベッドに座っていた。

「裕希!!」

「裕希くん!?!」

秀と朝子も部屋へ飛び込み、和人より先に部屋の電気を付けた。

「.....」

「裕希.....?」

和人は、裕希の右肩に手をおいて軽くゆすった。「どうした?裕希。」

「.....」

少年は彼の台詞にゆつくりと顔を上げた。

手のひらも額も汗ばんでいる。

「裕希くん……！」

朝子は慌ててカウンター・キッチンへ行き、手近かなタオルを水でぬらすと再び、和人の部屋へ戻ってきた。

「しつかりして、裕希くん。」

その額を、冷たいタオルで拭う。

「……朝子さん……。」

裕希はやっと、気づいた風だった。「俺……どうして。」

「もう大丈夫だから。安心して。」

朝子は彼の汗を拭いながら、「和人も秀もいるから……！」

「和人……。」

傍らによけていた和人に、裕希は声をかけた。

「大丈夫か、裕希。」

和人は心配そうに呟いた。

「うん……大丈夫。ありがとう、朝子さん。」

裕希は軽く吐息を漏らした。

その視界に、散らばってしまった夜食が目に入る。

「あ！朝子さん、ごめんなさいっ！」

現実に戻った裕希は、朝子に叫んだ。

「大丈夫よ、裕希くん。」

彼女も安心したように、顔を上げ、「ほら。外から帰ってすぐ寝ちゃったから、夜中におなかすくんじゃないかと思って置いただけなんだから。」

「そうそう。」

秀も頷き、「で、なけりや俺の分になってただけの話。」

「それより、どうしたんだ、裕希。」

和人は裕希の額に手を置いた。「……少し熱があるようだな。それで、魔されたんだろう。」

「熱？」

少年は小首を傾げた。「全然気付かなかった。ただ、変な夢を見て……」

「夢？」

「うん……よく覚えてないけど」

裕希は和人の瞳を正面から捕えて、「ただ、早く和人をよばなくちゃって。『あの人』が。」

「あの人？」

不可思議そうにEDWINのGパンに白いTシャツを身にまとった、和人より長身の秀は、「あの人ってどの人。この新宿にお前知り合いとかいるの？」

「ううん、いない。」

少年は首を振り、「だけど……なんだったんだろう。」
再び俯く。

二人のやり取りの間に、床の片づけを終えた朝子は、

「きつと久しぶりの都会だから、はしやぎすぎて疲れちゃったのよ、裕希くん。気にすることはないわ。」

「本当は」

ニヤリ、と笑って秀がちゃちゃを入れる。「『お父さん』って呼びたかったんじゃないのか？」

「秀さんっ！」

裕希は顔を真っ赤にして、「そんなじゃないよ！俺、もう17歳だよ！」

「怒らない、怒らない。」

秀はちらつと赤い舌を出した。

「ほら、裕希。」

和人は、振り向いた裕希に、「今度は、寝ぼけないでちゃんと寝るよ。」

「和人……。」

自分を見つめる、翡翠色の瞳に。

『闇色』のビリジアン・ブルーの瞳を持つ青年の眼差しが重なっ

た。

桜。

一面の桜の絨毯。

横たわる青年を見降ろす、もう一人の青年の頬には――一筋の涙が流れていた。

「・・・和人。」

裕希は言った。「和人は何処にもいかないよね。」

「え・・・？」

彼は目を見開いた。

一層光に輝く、綺麗な翡翠色の瞳――

「行くわけないじゃん、裕希ちゃん！」

秀は笑いながら、Gパンに白い長袖のシャツ姿をした和人の肩に手をかけ、

「俺も、朝子も・・・もちろん、和人も。お前が『嫌だ』って言うまでいてやるからさ。」

「嫌だなんて」

裕希は思わず声に力を込めてしまい、「言うわけないじゃん！決まってるよ！」

「はいはい。」

秀はそんな少年の素直さに、思わず苦笑した。

「それだけ元気が戻れば、もう大丈夫ね。」

長い、茶色い髪を揺らせて、エプロン・ドレス姿の朝子は、「今、ホット・ミルク入れてきてあげる――メープルもほんのちょこつと入れてね。そうしたら、朝までゆっくり眠れるわよ、熱なんてすぐ下がっちゃう。」

そうして、トレイを手に部屋を後にした。

「さ、俺たちも引き上げますか、ダンナ。」

「そうだな。」

和人も立ち上がり、「もう大丈夫だからゆっくり寝な。何かあったら俺でも、秀でも呼べ。すぐに来るから。」

微笑した。

その微笑の『儚さ』。

「うん。」

出会った時から、気づいていた……その刹那の時を刻んで生きているような、彼の儚い微笑。

寂しそうで。

でも、嬉しそうで。

だから。

裕希の胸は余計、苦しかった。

『一緒にいたい』と思った。

< 9 >

3人は深夜のカウンター・キッチンで、朝子の入れたブラックのキリマンを前に沈黙していた。

裕希はもう、また眠りについた頃だろう。

朝子が口を切った。

「やっぱり裕希くんを早くこの新宿まちから出さないかね。」

秀が答える。

「そう素直に帰るかな。和人に完全になついちゃってるし……」

俺ちゃん同様。」

と、見えない尻尾をぱたぱたと振ってみせた。

「俺はお前の飼い主か。」

和人が呟いた。「とにかく『儀式』も近いし……どうするかな。」

「先刻さ」

朝子が和人に、「裕希くんが変な夢見て魔されたっていうの、あの昼間の『占い師』の事、和人が彼の記憶から『封印』したからじゃないの？」

「和人がそんなちやちい『封印』の仕方するかよ。」

秀はキリマンを一口飲み、「だとしたら、その『封印』を『邪魔』してるヤツがいるってことだぜ、朝子。」

「やつぱ」

朝子はため息をついた。「九桜の側か……。裕希くん、狙われちゃってるのね、たぶん。」

「俺とかかわったせいでね。」

和人もキリマンを一口飲み、静かに言った。「あの九桜の側の『占い師』との間に何があったかはわからないけど、裕希もあつちに術をかけられたのかもしれない。」

「そうかもな。」

秀は答えた。

黒縁の伊達メガネを少し上げ、「だとしたら、あちらさんも裕希を『結界の外』へ帰したりしないだろう。」

「それより、秀」

和人はそんな彼を目を細めて見つめ、「何か、『臭わない』か。」

「ああ、そうだな。」

秀は、ニヤリ……と不敵な笑みを浮かべた。「俺ちゃんたちの出番らしいぜ。」

言うが早い。

彼は勢いよく席を立ち、ベランダへと向かいそのまま夜空へ飛翔した。

その後を追う、和人。

「気をつけて、2人共！」

朝子はエプロン・ドレスの裾を翻して、ベランダへ駆け寄って叫んだ。「満月はもうすぐよ！」

「オーライ！」

漆黒の天空の彼方から、秀の声だけが舞い降りてきた。

新宿3丁目。

人も途絶えたオフィス街に彼らの姿はあった。

「遅かったか・・・」

白いシャツ姿の和人は路上にひざまづき、冷たいアスファルトに横たわるスーツ姿の女性の首筋に左手をあてた。

そこには、2つの赤い傷跡。

「九桜の側か・・・！」

秀が目を細め、そして周囲を見回して叫んだ。「おらっ！隠れてないで出てこいよ、吸血鬼ども！」

その声に反応したかのように、無数の紅の瞳が周囲の闇から浮かび上がった。

「仕方がない・・・。九桜の側にするわけにはいかない・・・！」

和人は苦しげに呟いて、左手を握りしめた。
迸る蒼い閃光。

「ギャーッ！！」

路上に横たわっていたスーツ姿の女性は、一瞬のけぞり、和人を紅の瞳で睨みつけるとそのまま、また路上にひれ伏した。

「今度はお前らの番だ。」

憎しみを込めた翡翠色の瞳が闇に煌めき、その口元には白銀の輝きを持つ2本の牙があった。

秀と和人は、まるで申し合わせたかのように、左右へ散った。

「待てっ！！」

それぞれの後を追う、無数のヴァンパイアたち。

「待とうか？」

秀は一瞬立ち止まり・・・そのまま、追いかけて来たヴァンパイアの一人に蹴りを入れた。

「ウガーッ！！」

悲鳴を上げて、後の仲間の中に突き出されたヴァンパイア。

たじろぐ、『闇の者』。

「満月真近の狼男をなめちゃいけないぜ。」

不敵な笑みを浮かべる秀。「お次はだーれ？」

その頭上を一筋の碧の光が走る。

と、秀が振り向くのと同時に彼に襲いかかるうとした一人のサラリーマン風のヴァンパイアがその光を浴びて闇に散った。

「秀。」

「悪い、悪い、和人ちゃん。」

秀は、左から襲ってくる二ト風の男性を殴り倒し、背に並んだ和人へ肩越しに答えた。

「あと2時間もすれば、夜明けた。」

和人は左手を振り上げて言った。「俺は九桜の一族を『闇』に葬る気はないんだ。」

「和人・・・！」

「ただ、『光』と『闇』の境界線を越えさせたくないんだ・・・九桜の二の舞だけはさせたくない！」

哀しげな眼差しで、前方の女性を見つめ左手を振り下ろす・・・

「キヤーツ！！！」

その『光』を受け、女性は同様、『闇』に散った。
その時。

周囲の雰囲気が変わった。

和人と秀を襲う、紅の瞳は相変わらず、ただ、『彼女』の『降臨』だけが周囲のざわめきを抑えつけた。

「甘いよ、和人。」

彼女は言った。「その『光』^{ひと}の持つ『優しさ』が命取りなんだよ・・・『闇』を率いる唯一無二の『帝王』としてふさわしくないのだよ。」

「お前は！」

和人は目を細めた。「昼間の・・・」

「そっだよ」

彼女――黒いレースを口元まで覆った女性は、昼間、裕希を『占った』、『占い師』だった。

「お前が裕希を！」

秀は、占い師を睨みつけた。「『術』でもかけたか・・・！」

「違うよ。」

占い師は、うつすらと笑った。「私はあの子が望むようにあの子の運命を変えてあげただけさ。」

口元に2本の牙を宿し――

夜の静間に、女性の高らかな笑い声が響いた。

< 10 >

漆黒の闇の中、殺気に満ちていた空気が彼女の訪れと共に収まった。

「もう遅いよ、帝王。」

占い師は言った。「あの坊やは既に我らの手中にある。」

「なんだと！」

秀は怒鳴った。「ホラふくんじゃねえ！！」

「嘘じゃないよ。ごらん、この水晶を。」

と、歩道橋の上に降り立った彼女は右手をかざした。

そこには、不思議な透明感のある蒼い水晶。

そして、ゆつくりと浮かび上がる――眠る裕希の姿。

「裕希っ！」

和人は叫んだ。「やっぱり貴様か・・・！」

「そっだよ。」

彼女は艶やかな笑みをレースの下に浮かべ、「やがて、あの坊やもお前の『本当の姿』に気づくだろう。」

「！！・・・」

「そして、この新宿まちの『住人』になるのさ。」

「そんなことさせるかつ！」

秀は叫び、「裕希は俺たちが守ってみせる！」

と、勢いよく地を蹴ると、占い師の胸元へ素早く飛び込み、その鋭い爪を突き立てようとした。

直前で。

女性は今身をかわした。

「見てるがいい――帝王。この街の『闇』を。あの坊やの運命を。そして」

女性はそこで一呼吸置き、至福の笑みを浮かべた。

月光に映える紅い瞳と口元の2本の牙――

満足気な声で、

「九桜様の『復活』を。」

「何！？」

「何だと！！」

和人と秀は同時に叫んだ。

和人は言った。

「九桜の『復活』を操っていたのはやはり貴様か！」

「私は九桜様の『直系』ではないが、『闇』の力を持って生れて来た。『光（人）』の中で生きられないと悟った私は、『闇』の中で生きることを決めたのさ。だから一族に

匹敵する『力』を持っているのさ。」

「！・・・」

「そんな脅しに乗るか！」

秀が目細めて言う。

「脅しかどうかは、そのうちわかるよ、ウルフ・ガイ狼男。」

振り返る秀に占い師はそう告げた。

「くそっ！」

再び、占い師に向けて右手を伸ばす秀――しかし、それは空を切っただけだった。

「ほほほ……」

先ほどまで周囲に満ちていた紅の光が少しずつ消えていくのと同じ時に彼女の姿も『闇』に溶けて消えていった。

残ったのは、眼下に広がる、ネオン・ライト人工灯。

秀は歩道橋から、路上に立つ和人の下へ舞い降りた。

「一体、どういうことだったの。」

悔しげに、秀が呟いた。

「彼女の言ったことは、本当だろう。そして」

和人は、秀を視界の隅に収め、「もうすぐ『満月』。『儀式』も近い――あの占い師（九桜の側）はそれを狙っているのかもしれない。」

「だけど、どうして裕希が。」

秀は反論した。「あいつは普通の人間だぜ。何も感じない。」

「そうだね。」

静かに返す彼。

ゆつくりと、西新宿方面に向かって歩き出した2人。

「『運命』が変わり始めているのは確かだろう。」

和人は言った。「裕希と俺の『運命』――もしかしたら、あの占い師は『闇』の力をもつて裕希を『選んだ』のかもしれない。」

「九桜の『復活』のためか？ 和人。」

傍らの秀が言った。「裕希がここに来たのも『運命』っていうのか？」

「わからない。」

和人は考えながら、「秀が言うとおり、裕希は普通の人間だ。俺たちのことも朝子のことにも気づいてない――でも、このままこの街から出させても、彼女の言うとおり

『運命』で新宿（こし）に帰ってくるかもしれない。」

「たった1日で裕希はお前になついちやってるしなあ。」

秀は顔を空に向けた。

『闇』が薄らいで来てる――東から浮かんできた陽光のせいだ

ろう。

「だけど、和人。」

秀は和人の肩に手をかけ、「今のお前には『光』^{ひと}としての生活がある。帝王だからといって、その『光』と『闇』の境界線を越えようとする者を追いかけて、いつしか

また『闇』に身をまかせたりなんかするなよ。」

それから、「あの占い師め。ペテンだな。」

「そうあつて欲しいけど。」

和人は怒る秀の横で、歩きながら微笑した。

いつもの、あの刹那の時を紡いでるような、儚い微笑。

『光』も『闇』も、魅了せずにいられないその美貌。

「和人――」

秀はぽつり、と言った。「もう何処にも行くなよ。」

「秀……」

和人は一瞬戸惑い、そして、「行かないよ。お前や朝子がいる。」

ピーッ

彼方で始発を告げる笛の音がした。

陽光は、人工灯を包み、ビル街にも伸びてきている。

もうすぐ『光』の時間になる……

『時』は、その命の儚さ故に、人に『光』を与えた。

永久を生きるものには、『闇』を。

それが。

『光』と『闇』の境界線を越えてはいけないという理由。

早朝の風が、和人の碧がかつた髪を揺らした。

「九桜の『復活』か……」

ため息交じりに、和人は呟いた。

あれから、1週間が過ぎた。

その日、祐希は和人との約束通り、久し振りに八王子にある学校へ登校した。

「これから、ちょっと成城の実家から通うことになったんだ。」

友人の峯倉からの問いかけに、彼はそう答えた。

「そうだったんだ。」

峰倉は安心したかのように、「寮の部屋もこの間片づけてあったし、お父さんと一緒にイギリス辺りに留学でもしちゃったかと思った。」

「多いからね、この学校。」

放課後の3階の教室で、「留学する人って。」

「そうそう。」

彼らは互いに帰宅の用意を始めた。

「でも、安心したよ、祐希。」

峰倉は祐希の顔を見つめ、「バスケット部のエースが抜けちゃ、来週の試合に支障が出るからな……ちなみにもう昨日から早朝練習始まってるからな、ヨロシク。」

「了解、部長。」

祐希は笑顔で答えた。

帰りの京王線の中、日差しはもう傾き始めていた。

（バイト先も探さないと、和人たちに悪いし。）

でも、一人で新宿^{まち}を出歩くことは、和人たちから禁止されていた。理由はどうかわからないけど、彼らの言うとおりにするようにした。

バスケット部の放課後の練習も、短時間に切り替えて、その分、早朝練習でフォローしようと思っていた。

相手は、地区大会2連覇の高校。

いつもシード校で、準決勝で大体当たる学校。

（そうだよなあ……。放課後がダメなら朝だよー。朝なら和
人たちも許してくれるだろうし。）

そして、もうひとつ、心の中で呟く。（バイト、許してくれるか
なあ。）

そんなことを考えているうちに、電車は京王新宿線の地下ホーム
へ滑り込んでいった。

帰りの学生で込み始めた車内、地下のホームへ滑り込んだ電窓か
らは先ほどの傾きかけた日差しは見えない。

薄暗くなつて、社内アナウンスが響く。

祐希は何気なく、その暗い窓を見つめた。

すると、そこに一人の女性の姿が映っていた。

「！……」

何所かで見覚えのある、口元までレースを覆った黒いドレス姿の
女性。

その口元には。

2本の鋭い牙が見えた。

「誰……！」

彼は思わず振り返った……。が、その背後にある姿はそこにはな
かった。

シャー

左右にドアが開く。

祐希は降りる人波に押されて、電車を降りた。
振り返る。

しかし、何所にも彼女の姿はなかった。

「お帰りなさい、祐希くん。」

カウンター・キッチンの中から青いドレス姿の朝子が長い髪を揺

らして玄関を振り返った。

「ただいま！」

制服姿の祐希はカウンター・キッチンに座ると、「どうしたの？朝子さんお出かけ？」

『彼ら』の姿は今はここにはない。

見回すとそれがすぐわかった。きっと仕事に行ってるんだろう。

「今夜、結婚式があるのよ、祐希くん。」

初夏。

冷たいミルク入りのキリマンが彼の前に置かれる。

カラン・・・

氷がグラスの中で揺れた。

喉が渴いていた祐希は、ストローで一気にそれを飲み干した。

「ありがとう、朝子さん。」

祐希はそれで落ち着いた様に、大きな深呼吸をついた。

「それで」

彼は言った。「結婚式なの？夜に？」

「うん、ちよつとね。」

朝子は小首を傾げて答えた。「仕事がお互いに忙しいらしいし・・・

・
和人と秀もね。」

「そう。」

「もう一杯飲む？」

「うん！！」

祐希は喜んで答えた。

広い、フローリングの室内はクーラーの涼やかな風に満ちている。少し、汗をかいていた祐希にはそれが心地よかった。

2杯目のアイス・コーヒーが目の前に置かれた。

喉の渇きが多少癒えた祐希は、今度はゆっくりと飲み始めた。外は夕焼け。

もうすぐ『この街』に『夜』が来る

「祐希くんも結婚式来てね。」

コーヒーを飲む祐希に朝子は告げた。

「え・・・！」

祐希は少し驚いた。

和人と秀から新宿（この街）の『夜』には特に注意するように言われてた。

特に、『夜』は一人では出歩かないようにと・・・

「いいの？朝子さん、俺・・・」

「大丈夫よ。」

彼女は彼の心配を払拭するように微笑み、「今夜は和人も秀も一緒だから大丈夫よ。2人の『許可』もとれてるし。」

と、南側の和人の部屋を指さして、「あそこに祐希くんの服も用意してあるから、ちよつと来てみて。」

「うん、みてくる！」

祐希は元気よくそう答えると、「でも、楽しみ！和人たちと出かけられるなんて。」

あれから、秀の仕事の事情で和人とはあまり話せなかった。

大抵、彼らが帰宅するのは、深夜か早朝。

AM6：00頃目が覚めると、秀はカウンターに朝子と既にいるが、和人は祐希と一緒にベッドでまだ深い眠りにについている。

そんな時はいつも、和人をそのままにそつとりビングへと行く。

（そんなに大変なのかな？和人の仕事。）

出会ってから一度も、『朝』に起きた和人を見たことがない。

パジャマにも着替えず、シャツにGパン姿で永遠とも思える眠りにについている。いつ帰って来たかも祐希にはわからない。

その理由を聞くと、大抵和人は、

「秀のやつがこき使うからな。」

と、言い、その傍らで秀が苦笑いを浮かべる。

「和人ちゃんには、しっかり稼いでもらわなきゃ。」

その度に、やはり祐希は、
（やっぱ、ホスト系の仕事してるんじゃないかな・・・？）
と、その端正な顔立ちの寝顔を見つめ思うのである。

キーツ

部屋のベッドの上には、黒いスーツと青いネクタイが置いてあった。

ブランド品であることは、祐希にも一目でわかった。
たぶん、『Room's』のスーツとネクタイは『MONA』だろう。

コン　　コン

「入るわよ、どう？」
ドアを少し開けて、朝子が小首を傾げる。「和人が選んだのよ。
どう、気に入った？サイズは？」

「朝子さん。」

祐希は苦笑し、「何も、ブランド品じゃなくてもいいのに。」
和人も時々、「偶然見付けたから。」と言ってブランド品を祐希に買って来る時がある。

「ブランド品じゃなくていいんだよ。」

「気にしないの。」

朝子は微笑し、「和人ってそういう仕事モデルしてるから、あっちこっちに顔が利くのよ。それだって、ただでくれたみたいなものだし、
時たまブランド品もらってくるでしょ？それもメーカーからの差し入れだったり、仕事で使ったものとか、秀宛てにプレゼントされたりするものだから。」

「はあ、そうなんだ。」

祐希は、初めて納得した。

「秀はブランドに構わない方だから、全部和人にあげちゃうのよ。実際、和人宛てのプレゼントもあるしね。」

朝子は言った。「どう？着てみて。リビングで待ってるわ。」

「うん、朝子さん。」

それなら、あんまり気を使わないで着れると思った。

と、同時に、和人や秀と久し振りに一緒に出かけられることが、祐希は何よりも嬉しかった。

（結婚式か。）

祐希は、薄日が入るカーテンを閉め、制服のボタンに手をかけた。（お父さん関係の結婚式しか出たことないから、緊張するなー。）目の前のスーツに手を伸ばし、胸にあててみた。

ちようど、ぴったし。

「今夜は」

朝から晴れ渡った空を思い浮かべながら、「満月か。綺麗な結婚式になるだろな・・・でも、二次会なのかな、夜ってことは。和人の知り合いなんだろうな。どんな結婚式なんだろう。」

祐希の思う通り、今夜は『満月』。

新宿の『夜』が静かに、動き出していた。

< 1 2 >

深夜の新宿。

時計の針はもう、午前0：00を廻った頃であろう。

満月は紅く・・・輝いていた。

その『結婚』という『儀式』の真実を知る者は何人いるだろうか。

『闇』の者にしか、それはわからない。

もちろん、裕希にもその意味はわからない。

「ねえ、秀さん。」

傍らに座る秀に裕希は尋ねた。「二次会なの？結婚式は。」
と、周りを見回してみる。

西新宿の片隅にある、和人と秀がよく通う、バーだった。
薄暗い照明の中に十数人の姿。

皆、秀と同じくモーニングを身にまとい、赤ワインを飲んでいた。
「ま、そんなようなものかな？」

秀は伊達メガネ越しに視線をステージから、裕希に戻し答えた。
ステージの中央には、黒いクラシック・ピアノが置かれ、シヨパ
ンの曲が店内に流れていた。

弾いているのは、朝子だった。

「内輪でしかやらない、結婚式だからね。」

秀が言う、「ダンナさんが和人の友人なんだ。」

「そうなんだ。」

裕希は答えた。

『二次会』で『和人の友人』。

それなら、こんなに遅くても平気だろう・・・。

裕希は、和人からプレゼントされたスーツを着こなし、氷が揺れ
るオレンジ・ジュースのグラスを手にした。

もちろん、ノン・アルコールである。

『絶対、秀や朝子と一緒にいろよ』

夕方・・・といっても、もう満月は天空に上がっている夜。

裕希の携帯に、和人から電話が入った。『俺は少し遅れるけど。』

（遅いな、和人。）

『式』が始まってステージ上での新郎新婦の『誓い』が終わり、
その席を外したというのに和人の姿はまだ見えない。

撮影の予定がある、と秀は言っていたが、当の秀は今、ここにい
る。

（『Office To One』の別のカメラマンが撮って
るのかな？）

裕希は思った。

しかし、和人を撮るのはいつでも秀だということを、裕希は朝子から聞いていた。

（おかしいな・・・）

微かな疑問が、裕希の心の中に浮かぶ。

（朝子さんも秀さんも、何か隠してる・・・）

ポロ・・・ン

ショパンの曲が終わる。

緑色のドレス姿の朝子が、クラシック・ピアノの前に置かれた椅子から立ち上がると、皆、一斉に立ち上がり拍手を送った。

（今なら）

ライブ・ハウスも兼ねるこのバーには、控室へと続く扉がある。

新郎新婦もそこから出て行ったのを、裕希は見ていた。

「・・・・・・・・」

隣の秀は知り合いらしい傍らの男性と談笑している。

人々のざわめきの中、裕希は静かに秀の横を離れ、そっとその控室へと続く扉へと向かった。

< 1 3 >

灯りは通路の天井にある、点々とした小さな赤い照明だけである。

裕希は、その灯りを頼りに控室へと向かった。

（この突き当たりかな？）

そっと、薄暗いタイル張りの廊下を歩いていく。

「Mi Amos Vin。」

男性の音がすぐ前から聞こえて来た。

（この奥だ。）

少し立ち止まり、『中』の様子を窺う。

背後からは、ステージのある部屋からの喧騒が聞こえてくる。

「Mi Amos Vin。」

今度は、女性の声。

（これって何語だっけ・・・どっかで聴いたことある。）

微かな金色の光が足元を照らしている。

控室の扉の鍵はかけられていないようだ。

「・・・。」

裕希は、音を立てずにその扉を少しだけ押し開いた。

中にはウェディング・ドレスの女性と、モーニング姿の男性。

新郎新婦だった。

そして、後ろ向きでわからないけれどもう一人の男性の姿と、奥には緑色のドレスを着た女性・・・朝子だった。

「朝子さん・・・！」

いつの間にステージから、この控室に来たのか。

思わず声を出しそうになった裕希は、両手で口を押さえた。

それから、数人のモーニング姿の男性。

（何やってるんだろう。）

新郎新婦を取り囲み、やがて、

カチツ・・・

天井のライトは消され、各々が持つ蠟燭だけが灯りとなった。

「汝はこの女性を『永久』の伴侶と誓うか。」

低い・・・だけど、よく澄んだ甘い声。

聞いたことある・・・和人の声だった。

「誓います。」

新郎は和人に言った。「帝王の意のままに、『永久』を供に。」

和人は黒いスーツに、赤いネクタイをしているのが、微かにわかる。

「汝は。」

和人が少し横を向き、女性に尋ねる。

「誓います。」

新婦は答え、少し和人の近くによった。

蝋燭の炎が、風もないのに揺れる――

「帝王。」

「帝王――」

蝋燭を手にした男性たちが、和人のことを『帝王』と呼ぶ。

（そういえば――）

裕希は必死に考えようとした。（何処かで聴いたことある。和人を『帝王』と呼ぶのを。）

突如。

脳裏に、黒いドレス姿の、あの『占い師』の姿が浮かんた。

「！・・・」

（違う！）

彼は感じた。（これは『結婚式』じゃなくて、何かの『儀式』だ！）

と、同時に『儀式』は始まった。

和人が新郎の首筋に、自分の唇を当てた。

「我が一族に。」

和人が呟く。

サア・・・

月光が。

窓から忍び込んだ満月が二人を暗闇に浮かび上がらせた。
フル・ムーン

「和・・・っ！！」

それは、和人の口元に二本の牙が煌めき、新郎の首筋に立てられたからだった。

『儀式』。

ガタンッ・・・！！

「裕希くんっ!？」

蠟燭を手にした朝子は振り返った。

裕希が、その控室の扉を大きく開けたからである。

（『お前もそのうち彼の真の姿を知るだろう。』）

占い師の言葉が、再び浮かぶ。

そう。

『あの日』、裕希は和人の『正体』の一部を見ていた。
だけど・・・『記憶』は消されていた。

「裕希！」

『儀式』を終えると、和人は振り返った。

「・・・和人なんだね」

裕希は、ぽつり、と言った。「『あの日』の記憶を消したのは。」

「裕希・・・」

「違うのよ、裕希くん！」

『儀式』に参加した数人の者たちの間をかき分け、「あれは、
人が裕希くんの事を心配して・・・」

「朝子さん、俺、わからないよ!!」

そんな朝子の言葉を制して、裕希は叫んだ。「わからないよ、
人。和人ってなんなの？」

この新宿は一体、なんなの？」

疑問を必死に打ち消そうと頭を振る。「和人もあの占い師と一緒
なの？九桜とかいう『帝王』と同じように、『闇』と『光』を統
べる『帝王』になろうとするの？」

この街中の人をみんな和人の『一族』にしようとしてるの？」

「違うっ、裕希！」

和人は哀しげに叫び、「裕希には知られなくなっただけ。」

「わからないよ、和人も秀さんも、朝子さんも!!」

次から次へと、和人の『存在』を否定する台詞ばかりが、考える

前に出てくる。

右の掌が痛い――。

「……」

広げてみると――紅に染まっていた。

「裕希くん、その手！」

朝子が気づき、小声で叫ぶ。

そこは。

あの『占い師』が、長い爪を突き立てたところ。

「裕希くん、落ちて着いて聴いて！」

朝子は、裕希の両肩に手を置き、「確かに――悪かったわ。私たちの事を隠していたの。」

オイデ……

「!……」

あの占い師の女性の声が頭の中に響いてきた。

……ニサレルヨ……

「……何……」

必死にその言葉を聴こうとする。

朝子の声は――今の裕希には届かなかった。

イチゾクニサレルヨ……

「一族……」

裕希は呟いた。

『闇』ニソマリタイカイ?

『運命』ヲカエタイトオモワナイカイ……?

「裕希……！」

心配そうな和人の翡翠色の瞳。

だけど、今は……その瞳から、眼差しから逃れたかった。

「ごめん……！俺……和人、朝子さん……！やっぱわからないよ、全部……！」

「裕希っ！」

「裕希くんっ……！」

二人の制止を振り切り、踵を返すと裕希は控室を後にした。

ドンッ！

「裕希！」

出口へと続く廊下の途中でぶつかった相手は、秀だった。

「秀さんっ……！」

「おい、裕希……！」

秀に腕を掴まれたのを振りほどき、裕希は出口へ向かった。

（あの占い師の人が『全て』を知ってる……。）

バンッ

扉を押し開けると……

道路の向こう側に見覚えのある女性が静かに立っていた。

「……！」

紅の口元に二本の牙を宿して……。

彼女は言った。

「変えてあげるよ……お前の『運命』を。」

満月は……紅を宿していた。

パシッ！！

朝子の平手打ちが、秀の頬を直撃した。

「秀！なんで裕希くんから目を離したりするのよ！もし、『九桜の側』にでも連れ去られたらどうするの！？だから、一人にしないで一緒に連れて来たんじゃない！」

「急にいなくなるから」

秀は怒る朝子を睨みつけ、「俺だってすぐに探しに行ったんだよ！」

バーの控室での会話。

先ほどまでの重々しい『儀式』の気配は見られず、今は電気の全てが灯っている。

「それで、裕希は？」

二人を両手で制し、和人は言った。

「喧嘩なんかしてる場合じゃない。」

「裏口から出て行ったのは知ってる。」

黒のコートを脱ぎ、朝子に渡す様子を見ながら秀がそう言つと、

「追いかけるぞ、秀！」

言うが早いか、和人はバーの裏口へと向かった。

「ALL LIGHT！」

秀も和人の後を追った。

「二人供がんばって！」

笑顔で朝子は彼らを見送った。「今夜は『満月』よ！」

バーからかなり離れた所。

裕希は『占い師』と供に、新宿御苑にいた。

「ほら、お前の運命は変わっただろ……。」

と、彼女は少年の右手の平を指示した。

「――。――」

見つめると、そこには紅の十字。

「あなたは」

裕希は目を細め、「『全て』を知っているの？」

呟く様に尋ねた。

「わかるさ――私は『占い師』だよ。」

彼女の瞳の色も紅――「お前がこの新宿^{まち}に来たのも『運命』――

――そしてこの先お前の『運命』が、『和人』の『運命』が変わるのも定め。」

囁くように言う彼女の声の虜になったかのように――裕希は彼女の前に立ち尽くしたまま動かなかった。

否、動けなかった。

そして。

まるで、裕希を取り囲むように樹木に囲まれた茂みの中から次々と浮かび上がる無数の影。

服装は様々だが、皆、闇の中でも煌めく紅の瞳を持ち、口元には

二本の牙を宿していた。

^{ヴァンパイア}
吸血鬼だった。

「お前も見ただろう、あの『儀式』を。」

「和人の――」

「そうさ。奴はこの『闇』を統べる吸血鬼一族の『長』なのさ――

――九桜様が『帝王』であられた時代^{とき}は良かった……」

と、懐かしげな声で、「様々な『闇』の者――^{ウルフガイ}狼男一族、鬼一

族など『闇』に生きる者を全て制し、我ら吸血鬼一族だけを『闇』

の『主』とした。

そして、九桜様が『光（人）』を制しようとした時――

と、そこで口調が厳しくなった。「『帝王』和人が現れた。闇の

世界に――否、『光』と『闇』に唯一無二の存在である『帝王』

が二人現れ、生粋の『闇』の

心を持つ生まれながらの『帝王』九桜様と『闇』に生まれながらも『光（人）』の心を持つ和人との間に、『唯一無二』の『座』をめぐって闘いが起こった。」

「――」

「そして」

そこで彼女は一呼吸置き、改めて裕希を見降ろした。「勝ったのは和人の方。」

「和人が」

掠れる声で裕希は言った。「和人が『闇』の――吸血鬼一族の長・・・『帝王』。」

「そうさ、故に」

占い師の口調がよりきつくなる。「魅入られてはならぬよ、その美貌に――その『心』に。」

「『闇』に染まらないために？」

「そうさ。お前はただ、九桜様の『復活』の為だけに――」

と、その時、占い師の言葉を遮る声が――あの聴きなれたよく澄んだ声が、満月をかかげる天空からそそがれた。

「そこまでだよ、『九桜の側』の者。」

金色の満月を背に天空に浮かぶ二人の姿。

和人と秀だった。

「わたさないよ、その子は。」

和人は言った。

「和人・・・！」

裕希は天空を振り仰いだ。

「和人っ！！」

もう一度叫ぶ。

あの夜――初めて出逢った時のように。

コレモ『ウンメイ』？

『あ、あの……待って!!』

祐希の声に振り返る二人。

彼は和人のコートの袖を掴み、黒のサングラスをじっと見つめて言った。

『俺を拾って下さい！不良になりたいんです。』

「裕希、おいで。」

芝の地に軽く舞い降りながら、右手を差し出す青年。

翡翠色の瞳がいつもより輝いて見え……いつも以上に優しい口調だった。

「俺たちは、何処へも行きやしないって言っただろ、裕希。」

ニヒルな口調で隣の秀が言う。「お前が、イヤだって言うまで。」

「秀さん……」

「そして」

和人が続ける。「何かあったら俺たちを呼べって……いつでも

何処でも」

「おのれ……『帝王』。」

占い師の目が細まり、ドレスの中から蒼い水晶を取り出した。

「見るがいい、『帝王』!」

そっぴうのと同時に、傍らの裕希を胸元へと思い切りの力で引き寄せる。

「裕希っ!」

「和人!!」

「誰にもこの『運命』は、変えられない!!」

水晶には、二人の青年の姿。

桜。

満開の桜吹雪が荒れ狂う……。

「!……」

和人は目を細めた。

その桜の中を歩む二人の青年の姿――翡翠色の瞳を持つ青年と、闇色のビリジアン・ブルーの瞳を持つ青年。

「くっ……！」

和人は下唇を強く噛んだ。

「どうした、和人。」

心配そうに秀が囁く。

「……なんでもない。秀」

頭を振って、和人は、「周りの連中を『かき回して』くれ。その間に、俺が裕希を取り戻す。」

言い終えた時には、既に彼は宙へ舞っていた。

「ようござんす！」

秀はニヤリ……と暗闇に浮かぶ影に向かって言った。「どこからでもかかっておいでませ。『満月』下の狼男ウルフ・ガイをなめたら危険だぜ。」

夜はまだ続く――。

< 15 >

深夜の灯り一つない、新宿御苑で――。

「本っ当、しつこいね、お前ら！」

サラリーマン風の男性をその鋭く伸びた爪で切り裂き、背後から襲ってくる少女には、

後ろ蹴りをくらわした。

「ぐあっ……！」

秀に蹴られた少女は、遙か眼下の新宿御苑の芝生に頭から叩きつけられたが、暫く

経つと、また起きて秀めがけて、突進してくる。

「ちっ、またか！」

秀は舌打ちをした。「キリがないぜ！」

満月は煌々と天空に輝いていた。

夜明けまでには、まだ間がある。

（こいつらは陽を嫌っている。）

額に宿る軽い汗を右手の甲で拭いながら、（『灰』になるからな。九桜の直系の血をひくわけではないから）

秀は思った。

しかし――あの『占い師』は昼でも『灰』にならない。

（そんな一族が、この『闇』にいるなんて聞いたことないぞ。）
新たに襲いかかる吸血鬼ヴァンパイアを避けながら、彼は思索した。

（もう一つ『闇』に一族がいたのか？九桜が制しきれなかった一族が・・・）

『占い師』を装う『闇の者』は、中空で和人と対峙していた。

「裕希っ！」

和人は左手に宿る青白い炎を、裕希を捕える彼女の胸元めがけて突き出した。

「甘いよ、帝王。」

『占い師』は右手の水晶を眼前にかざした。
すると。

和人が放った炎は、その水晶に『吸収』されていった。
そんな攻撃を続けるうちに、

（まさか）

和人は思った。

水晶が彼の攻撃を『吸収』するたびに、『占い師』の『闇の力』が増していくのではないか――？

彼は目を細めた。

それに気づいたかのように、『占い師』は、

「もう幾世も昔のことだ、帝王」

語り始めた。「私は生まれつき人の運命が解る『力』を持ってい

た。そんな私を人々は『神の子』として敬い尊んでいた。

行く末に迷う者には、その行く末を悟、迷う者にはその『出口』を与えた。」

「――・・・。」

「が、しかし」

『占い師』の表情が一変して、より鋭く憎しみに満ちた表情へと変わる。

「――しかし、ある夜、村に洪水が起き、村半分の人々が流されて死んだ。皆はそれを私が予知できなかった、『神の子』でありながら、と怒り、やがてそれは私を――私たち家族をも『呪われし者』とし、迫害し、遂には私を除く家族の全てが村人の手によって、家ごと火やぶりにされたのさ。」

「何だと――!!」

「わかるか、帝王。『光^{ひと}』の中で『闇』は生きられぬのよ。」

「・・・・・・」

「そして、一人残された私の前に九桜様が現れ『闇』へと導いて下さった」

彼女は、目を細めた。「私に『生きる』と告げたのは、九桜様なのだよ。だから私は『闇』に全てを委ねたのさ。」

和人の次の攻撃の手が、一瞬、止まる。
そこへ。

彼女が水晶を持った右手を振り下ろすと凄まじい『風』が起こり、和人へと向かった。

「よけて、和人っ!」

『占い師』に捕らわれたままの裕希が叫んだ。

――が、和人は避けきれず、地に叩きつけられた。

「つつ・・・・!!」

和人は苦痛に顔を歪ませた。

そんな彼に気づき、秀は和人の元へと向かった。

「和人っ！」

「・・・大丈夫だ。」

和人は静かに立ち上がった。

口元の血を左手で拭う。

「確かに」

和人は言った。「『光』の中で『闇』は生きられない。だが、その境界線を守れば、『光』も『闇』も共に生きることができる。その境界線を破ろうとしたのは九桜だ。

『光』をも制しようとした九桜は葬り去られて当然だ。」

「何を・・・！『闇』は『光』よりも勝るのだぞ！」

「そんなことないっ！」

傍らの裕希が叫んだ。「あなただって『闇』に染まる前、家族がいたでしょ？友達がいたでしょ？好きな人もいたでしょ？」

「何を・・・！小僧！」

「それが『光』の持つ『温かさ』なんだよ。『闇』の人はきっとそんなこと知らないと思う。」

「裕希・・・！」

和人は翡翠色の瞳を見開いた。

「和人は」

裕希は続けた。「和人は違うよ。和人は優しいし、秀さんや、朝子さんがいる。『闇』に染まりきっていないんだ・・・だけど、その九桜っていう『帝王』にはそんな人いなかったんだよ。だから、『光』を否定しようとしたんだ！」

「こやつ・・・！言わせておけば・・・！」

彼女は、その水晶を天空高くかけ、裕希めがけて振り降ろそうとした。

「今だ、和人っ！」

秀が言ったのが早いのか、和人が『気づいた』のが早いのか・・・和人は天空に身を躍らせると、両腕を高くかかげた。

彼の両腕が青白い『炎』に包まれる。

すると、その『炎』の中から、一本の剣が現れた。

「秀っ！まわりをひきつけている、あの水晶が『鍵』だ！俺がやるっ！」

「了解、ダンナ！」

秀は身を翻して闇に集う紅の瞳に、

「こっちだぜ、鬼さん！」

紅の瞳は一斉に秀へと向かう。

その合間を縫って、裕希を抱く『占い師』の元へと和人は向かった。

「裕希を返せっ！」

その右手に握られた蒼い水晶に向かい、彼は両手で握り締めた剣を振り下ろす。

カチャ・・ン

「おのれーっ！！」

水晶を失った彼女は、裕希を放り出すと、和人へと向かった。

紅の瞳に口元には二本の牙を宿し。

刹那。

振り下ろされる、和人の剣。

「和人っ！」

光が――周囲に広がった。

< 16 > F I N

かつて。

この新宿には二人の『帝王』がいた。

『闇』の一族を統べる吸血鬼一族の、その長である彼らは、『

光』と『闇』とを統べる『唯一無二』の『帝王』の座をめぐり闘つた……この新宿^{まち}で。

そして……一人は永久とも思える深い眠りにつき……一人はこの現世^{うつしよ}へ留まった。

陽の光を、『昼の住人』へと明け渡し、『夜』の闇を駆け抜ける……。

決して越えてはならない、『光』と『闇』の境界線を越えようとする者たちを、『帝王』の名にかけてその手で葬るために。

新宿・大京町のマンションで。

「じゃ、和人は吸血鬼^{ヴァンパイア}で、秀さんは狼男^{ウルフ・ガイ}って事？」

「そう」

秀はにつこりと笑い、「冗談みたいな話だろうけど、本当。」

「マジ？」

裕希は一步身をひき、「……冗談……じゃないよね？」

「本当の話」

カウンターの中央に腰かけている和人は、続けた。「お前も見ただろ？昨日の事。」

「うん。」

裕希は頷き、「それだったら……全ての『事』がつじつま合う。」

「だろ？」

朝子が入れたキリマンを一口含む。「そういう事。」

「でも、和人は陽の光を浴びても、灰にならないよ。」

「そうだね」

和人は苦笑し、目を伏せた。「そういう体質らしい、『帝王』って。」

「血はどうしてるの？和人だってヴァンパイアだったら人の血が必要なはずでしょ？」

と、そこで裕希は、ふと思い出したように、「昨日の『結婚式』」

とかして？」

「あれは違うのよ、裕希くん。」

小首を傾げる裕希に今度は朝子が、「あの『儀式』はね、花嫁さんを和人の一族に加えるための『儀式』なの。ヴァンパイアは本来帝王の血を受け継がないと、

今の九桜の一族のように『人の生き血』を欲しがるの。帝王の血は濃いから、和人が直接一族に加えた人はその帝王の『血』^{エナジー}によって、帝王が生き

てる限り、人の血を吸おうという気持ちはおきないの。」

「じゃ、和人自身は？」

「それは、私……私が和人の血の提供者なの。」

「じゃ、朝子さんもヴァンパイアなの？ヴァンパイア同士で血を分けあってるの？」

「違うわよ、裕希くん。」

と、彼女は少し寂しげな表情を見せ、「私は普通の人間よ。でもね、血を吸われてもヴァンパイアにならない『力』を持ってるの。だから」

そこで、一呼吸置き、端正な横顔の和人に視線を向け、「歳はとるけど……和人と『永遠』を供にすることはできないの。」

「俺も」

と、秀は続け、「ウルフ・ガイだからヴァンパイアと違って永遠の命を持つてる訳じゃない。それに俺たちの一族は九桜が『闇』を統一しようとした時、

皆奴に葬り去られた。俺は一族でただ一人残った、ウルフ・ガイなのさ。」

「そんな」

裕希は眉をひそめた。「そうしたらみんな……和人も秀さんも朝子さんも一人きりじゃない。和人だけが最後に残るの？」

「そんなことないよ、裕希。」

和人は微笑した。「俺たちも裕希と同じ時間の中を生きてる……」

「一人ひとりとは『一人』かもしれないけど、俺には朝子や秀と同じ時間を――『今』を共に生きてる。」

「運命共同体なのよ、私たち。」

朝子も微笑んだ。「和人の時間の中ではほんの『刹那』な時間かもしれないけど、『今』と一緒に生きてる。」

「お前だつて言つたろ、裕希。」

秀は言つた。「もう一人の帝王 九桜にはそんな存在がいなかったから『闇』に染まってしまったんだと。」

「九桜・・・」

裕希は呟いた。「あの和人が葬つたつていう、ビリジアン・ブルの瞳の人？」

「裕希」

和人は怪訝そうに言つた。「どうして、お前が九桜のことを知っているんだ？」

「わからない」

裕希は首を振り、「ただ、あの占い師が俺に見せてくれたんだ。」

「あいつが、『闇』の一部を裕希に見せたのかもしれない。」

和人が答える。「この新宿^{まち}には、俺が結界を張っている――『外』の者が入つてこないように。九桜の側に襲われたり、『闇』にその心を委ねないように。」

「でも、どんな理由であれ、お前は来ちゃったもんな。」

伊達メガネをかけた秀が、「あの占い師が言つたように、本当に裕希の『運命』は変わってしまったかもしれないぜ。」

と、ニヒルな微笑を浮かべる。

「運命が変わる・・・」

裕希は呟いた。

「どうする？ 裕希くん。」

朝子は優しく問いかけた。

「今から帰つてもいいんだぞ。」

和人は、「記憶を封じてあげるよ。」

「――――」

裕希は暫く彼の瞳を見つめ、やがて、

「ううん。俺、ここにいる。」

力強く言った。「俺自身で選んだことだもん。自分の運命を変えたいってこと。」

「裕希――」

「俺も和人の『刹那』の時の中にいる一人だよ、もう。」

少年は笑顔を浮かべ、

「あの夜の出会いが全ての始まりだよ、和人。」
甦る、鮮やかな記憶。

『ちょうど買おうと思ってたトコ。』

不思議な光が宿る、和人の澄んだ翡翠色の瞳。

「自分の運命を変えるのは、自分だから。俺はこの街にいても『闇』には染まらないよ、和人。」

夏の爽やかな日差しと風が、一陣、広い室内に広がった。

「あ！」

裕希はカウンター・キッチンの時計に目をやり、「もうこんな時間、遅刻しちゃうよ！」

『不良志望』の無邪気な少年。

慌てて、南側の和人の部屋へと向かう。

「やば。」

秀も左手首の羅針盤を見つめ、「10:00からクライアントとの打ち合わせがあるんだ！その前にコンテ作つとかなきゃ――おい、和人。お前も打ち合わせに来いよ。」

「わかったよ、秀。」

和人が微笑して答える。

「忙しい、朝だこと。」

朝子がくすくすと笑う。

和人がプレゼントしてくれたワイシャツはそのままに、制服に着替えた裕希は、

「朝子さん、俺、朝食抜き。遅刻しちゃうから。」

と、声と同時に、黒い鞆を小脇にかかえて玄関へと向かう。

「ほら、和ちゃん、お仕事、お仕事。」

秀は嫌がる和人の腕を引っ張り、「今、寝たらまたお前『遅刻』すつからさ。オフィスでコンテ作るの手伝ってくれ。」

『理由』をこじつけ、玄関へとひきづっていく。

「1時間だけ。」

「だめ。」

秀は楽しそうに答え、裕希が待つ、玄関へと向かう。

「じゃ、そういう事で、朝子。」

「行ってくるーす！」

「・・・行ってくる。」

ボタン

閉じられた白いドア。

「本当に」

朝子は肩を落とし、「忙しい家ね、ここつて。『朝』も『夜』もないんだから。」

微笑した。

太陽の眩しさに目を細め、

「さてと。私もお仕事、お仕事。天気がいいからみんなのシーツも洗って、と。その前にこのドレス何とかしなくちゃね。」

『俺は『闇』には染まらないよ・・・この新宿まちにいても。』

新しい朝が、暖かな日差しに守られ・・・始まる。

ERTH
『

FIN : BGM 『 GACKT :
REB

BOY MEET VAMPIRE（後書き）

かなり古い作品のリメイク版です。おっ恥ずかしいー！・・・つてかキャラがプロット以外の動きをするので、作者は収集に悩めます（「¥」シリーズ物なので

ちよこちよこサイトUPしていく予定です。この後の話もう原稿できてますけど、マイ・ペース+「就活」のため、気長にお待ちくださいませ（――）ノペコリ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9576l/>

MOON-2 『BOY MEET VAMPIRE』

2010年10月10日02時16分発行